英語教育におけるディベート活動

各地のディベート教育

第1回　回を重ねるごとに盛り上がる千葉県の英語ディベート大会

近年，英語教育にディベートを取り入れる動きが全国的に広がっている。コミュニケーション能力をはじめ，客観的かつ多角的な視点，論理的思考力などが身につくとされ，高校生の英語ディベート大会が開かれるようになった。今号から本誌では，各地のディベート教育の現状とその効用をリポートする。第1回は千葉県の動向について，県立成田国際高等学校の小林裕先生にお話を伺った。

手探りで始めた県大会

「千葉県高校生英語ディベート大会」が開かれるようになったのは，今から2年前のこと。他県に比べるとまだ歴史は浅いが，県内では英語ディベートに対する教員や生徒の関心は年々高まりつつあるという。開催に至った経緯を小林先生は次のように振り返る。

「私は常日頃，スピーチ・コンテストとは別の形で，生徒同士が協力し合いながら，自分の考えを“英語で”表現する機会を持てないものかと思案していました。そんな折に，県教育庁の向後秀明指導主事（当時）から，英語ディベート県大会開催をご提案いただいたのです。私はフォーマル・ディベートの経験は乏しかったのですが，2009年度から県高英研の事務局長として，英語部会の全面的な協力のもとで，実施の準備を始めました。すでに3回開催されてきた全国大会事務局の手ほどきもいただきました」

小林裕先生

2009年当時は，県内でディベートに取り組んでいる学校もないわけではなかったが，予選会となる県大会がなく，そうした学校は個別に全国大会へ出場していた。第1回大会の開催に際しては，小林先生をはじめ関係者は手探りで準備を進めた。開催日程や場所の調整，ジャッジの先生の確保など，課題は多かった。

「ジャッジを50人近くの先生方に依頼しましたが，断られることも多くて…。最終的には日本人9人，ALT 9人の計18人を確保できました。ジャッジ・セミナーを事前に開催して，ジャッジ方法を理解し，当日は日本人2人，ALT 1人の3人制で各試合をジャッジしました」

第1回大会の出場校・チームは，5校7チーム。全国大会と同じ“The Japanese Government should prohibit worker dispatching.”を論題とし，リーグ総当たりで予選を展開した。そして，決勝トーナメントは各リーグの上位2校ずつ計4校で論じ合った。熱戦の末，稲毛高校が優勝し，成田国際高校は準優勝，佐倉高校が3位となり，上位2校は全国大会への出場権を獲得。3位の佐倉高校もオープン枠で出場した。その後，全国大会では，佐倉高校が9位，成田国際高校が13位，稲毛高校が19位という結果を収めた。

開催するごとにレベルも上がる

県大会や全国大会の様子は，大会終了後に開かれた英語部会や英語部会誌で報告され，さらに県大会決勝戦の録画映像を翌年度の英語部会で流したところ，第2回大会への出場を希望する学校は増えた。

2010年11月に開催された第2回大会は8校12チームが参加し，“Japan should significantly relax its immigration policies.”を論題とした。1位は市川高校，2位は成田国際高校，3位は稲毛高校という結果になり，12月の全国大会へと駒を進めた。

「開・閉会式と各試合の司会進行は生徒が務め，出場できなかった生徒にも活躍の場ができたことで，高校生の大会という色が濃くなったように感じます。全国大会では，稲毛高校9位，成田国際高校12位，市川高校16位という，前年よりも良い結果を残すことができ，試合を経ることに実力が上がっていると感じます。大会1日目終了後には交流会もあり，ディベートという共通の目的に向かってがんばってきたからこそ理解し合えるのか，初対面でもすぐに打ち解け，親交を深めていました」

毎回の授業冒頭で取り入れている「Basic Debate Lesson」で即答力を身につける

クイック・レスポンスで即答力を養う

こうしたディベートのもたらす教育的な効果について，小林先生は次のように語る。

「一つの論題に対して，肯定・否定の両側面から考えるため，論理的かつ多角的な視点が身につきます。また，チームメイトとコミュニケーションを積極的に取りながら意見を組み立てていくことで，人間関係も築かれていきます。ディベートは英語コミュニケーション力が高まることはもちろん，そうした人間としての成長が見られるのです」

さらに，小林先生はディベートで必要とされる「クイック・レスポンス」に着目している。相手の発言や質問に対して，すぐに反応することは，発信力を高めるのに効果的だという。成田国際高校の国際科で小林先生が受け持つ2年生の選択科目「コンピュータLL演習（CLL）」では，授業の冒頭15分間で，1対1もしくは，2対2によるクイック・レスポンスのスキルを高める簡単なディベートを行っている。これは，同校の生徒が，ディベートで準備した意見を述べることはできても，相手からの質問に答えられず，沈黙してしまう場面があったことを反省し，即答することに慣れる目的で取り入れたものだ。

例えば，「夏と冬のどちらが好き？」との質問に対し，一人は夏が好き，もう一人は冬が好きという立場に立ち，それぞれが好きな理由を5つ書き記す。そして，プリントに記載された定型文に沿って，一人が“Summer is better than winter because（理由）.”と発言すると，それに対し，もう一人が“You said summer is better than winter because（理由）.”と繰り返し，さらに“But I don't think so because....”と意見を述べ，今度は自分が冬を好きな理由を話す。そして，それに対して“You said winter is better than summer because（理由）.”と再び繰り返した後，“But I don't think so because....”と，反対意見を述べる。こうして，ディベートでの発言方法を身につけながら，相手の発言に即座に反論する力を高めている。

「年間を通じてこの活動に取り組みます。意見を述べやすい二者択一の簡単な質問から始まり，年度の後半には思考を必要とする高度な内容でやり取りします。わずか1年間で生徒たちは驚くほどレベルを上げ，2月に開催する校内ディベート大会では堂々とした論戦を繰り広げています。国際科の生徒たちは英語や国際交流に対するモチベーションが高く，英語を話せるようになりたいと積極的な姿勢で授業に臨んでいるのです。授業も英語で行い，生徒が自ら発信しようとする気持ちを引き出す授業づくりを心がけています」

国際教育推進特区ならではの教育

成田市では国際教育推進特区として，小学1年生から英語の授業を取り入れ，小中高が連携して英語や国際教育に取り組んできた。同校では，生徒が地域の小学校へSA（スチューデント・アシスタント）として英語の授業に入ったり，成田山新勝寺を訪れる外国人観光客を相手に観光ガイドとしてボランティア活動をしたりするなど，日々の英語の授業を実践する場を教室外に設けている。福尾俊彦校長によれば，SELHi指定校当時からの研究成果を現在も受け継ぎ，『世界にはばたける人間力を育成する』ことを目指した国際教育を充実させているという。英語ディベートもそうした教育の一環であり，小林先生のCLLの授業を通じて身についた発信力は，英検の二次試験対策などでも効果を発揮している。

福尾俊彦校長

成田国際高校をはじめ，県内の様々な高校へと広がり始めている英語ディベートの波。第3回県大会への出場希望校も昨年より増えている。今後の千葉県の動向に注目したい。